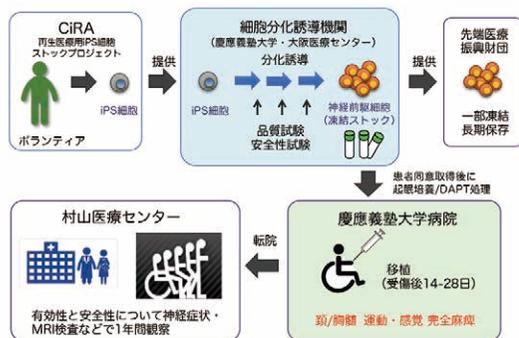


## 亜急性期脊髄損傷に対する再生医療



# FRONTIER

教育・研究の最前線

## 運動器の再生医療が目指すものは？

医学部 教授（整形外科学）

なかむらまさや  
中村雅也

以前、市民公開講座で、「先生の再生医療のゴールは何ですか？体中の臓器を再生医療で置き換えることができるようになれば、人類に不老不死は訪れるのでしょうか」と聞かれたことがあります。そのとき私は、「人間にとって死ねないことは、ほとんど不幸なことではないです。私が目指しているのは、元気でぼつくりです」とお答えしました。

機能障害をきたし、最も再生が困難な組織と考えられています。この脊髄損傷を治したいの思いで、これまで約20年間にわたり脊髄再生研究を行ってきました。そして世界初の亜急性期脊髄損傷に対するiPS細胞を用いた移植再生医療の臨床研究が、昨年12月に特定認定再生医療等委員会承認され、本秋には開始する予定です。

日本は超高齢社会を迎え、要介護者も年々増加の一途をたどっています。その背景には、10～12年といわれる平均寿命と健康寿命の乖離があります。この乖離を埋めることが、運動器再生医療の目指すところであり、それにより健康寿命を延伸できれば、寿命を全うするまで元気でやりたいことができる、すなわち元気でぼつくりにつながるわけです。

私たちの研究に対して多くの応援とともに、時に辛辣な言葉も頂きます。「先生は本気で脊髄損傷を治せると思ってるの？」と言われることもあります。答えは、私は本気で治せると思っていますし、その日が来るまで研究を続けたいと思っています。これまで不可能と考えられてきたことも、こつこつと努力すれば、必ずその日は来る。私は信じています。たとえば、一步一步のあゆみは小さくても確実に前進することが重要であり、これこそが脊髄損傷により不自由な生活を余儀なくされている患者さんたちの期待を裏切らないために最も大切なことだと思っています。研究のための研究ではなく、「From bench to bed side」※を合

言葉に、今後も研究を進めていきたいと思えます。なかでも脊髄が損傷されると著しい

運動器にはさまざまな組織があり、これらが老化や怪我で障害されると日常生活動作は制限されます。

※ 基礎研究の成果を臨床現場に生かす